

大学院祝辞

平成二十八年学位記授与式

京都大学の山中伸弥教授がiPS細胞研究によつてノーベル賞に輝きました。が、いまでは世界中の人々がその「万能細胞」に対する期待を大きく膨らませています。今や大阪大学を中心とするチームが目眼角膜をつくることに成功するまでに進展しています。また、学校法人日本体育大学と包括的協力協定を締結している学校法人名城大学の終身教授 赤崎 勇 博士ら「消費電力が少なく長寿命」の青色発光ダイオード(LED)を開発してノーベル賞を受賞しております。この偉業は、世界中をととも明るく照らしてくれたと讃えられています。

しかし、このいっぽうで、私たちは東日本大震災によつて引き起こされた原発事故を通して自然というものは制御不能なものであることを教わりました。科学とは何か、学問とは誰のためのものなのか が問われています。スポーツの世界も同様です。JADA、WADAの機関

が設立されていることはご承知の通りですが、緻密な化学（科学）的研究を重ねてドーピング行為を隠蔽し、その行為をさらに緻密な化学的研究によつて暴かねばならないという仕組みを、我々は必要としているからです。スポーツは誰のためのものなのでしょうか。決して化学者のためだけのものではないはずです。研究者・教育者としての新たな節目を迎えているこの日に、この問題について熟慮して下さい。

ノーベル物理学賞を受賞した益川敏英 京都大学名誉教授はその受賞記念講演で「戦争体験」を語ったことで知られますが、「ノーベル賞を授与された研究は、人類の発展のためにも、殺人兵器にも使用可能という諸刃の技術と言つていいでしょう。科学に携わる人間ならば、そのことを身に染みて感じていなければいけない。」と、科学者たちに訴えました（益川敏英；科学者は戦争で何をしたか、二〇一五、集英社新書、十四頁）。そして今、日本の大学やNPO法人においても、二〇一八年から米軍からの研究助成金を原資とした研究を行う研究者が現れ、二〇一五年度に防衛省が大学等を対象にした研究費制度を開始しています。（「朝日新聞」二〇一七年二月九日、嘉幡久敬）。

これを機に過去二回、軍事研究を行なわないとする声明を出した「日本学術会議」はその対応に追われ、新声明を準備しているのが実情

です（「朝日新聞」二〇一七年三月九日、塩原賢・赤田康和）。軍事組織からの資金の受け入れには慎重な意見が多いとはいえ、大学などの研究機関ではこの件に関する倫理規定を作るべきであるというメディアの論調に注目しなければなりません。（「朝日新聞」二〇一七年二月十日、社説）

伝統ある日本体育大学の大学院体育学研究科博士前期課程の修了、誠におめでとうございます。

皆さんはこの二年間を通して修士論文をまとめて自ら研究者への道を拓き、かつまた、より高次の、より質の高い保健体育教員・養護教員の資質を磨くべく、努力をされました。また、この大学院時代に大学院が用意するカリキュラムにそって勉学に精進することによって、皆さんは、教育者や研究者になるために必要な教養を身に着け、大きく成長したことを実感していることと思います。

一方、後期課程に進んでさらに研究を続けられ、博士の学位を取得した方にはさらに研究に専念し、研究職に就いて、この領域の学問の発展に尽力されることを期待いたします。そうはいつても、現場の教育に従事する方は、本日をもつて研究をする必要がなくなつた、

と申し上げているわけではありません。現場で実践する教育者と研究者が一体となつて情報を相互に交換し、共同研究によつて新しい知見を得なければならぬからです。

体育科学やスポーツ科学は何と言っても実践の学です。現場の実践から乖離した研究のための研究は、私たちの学問にはなじみません。私たちの研究の多くは現場で生起した現象に着目し、それをしっかりとキャッチして解明することからはじめねばなりません。研究成果を客観化するために研究の条件や枠組みを設定し、そこから得られるデータを量的に把握して、統計的に処理し、質的把握を試みます。したがつて、その研究が適用できる範囲はおのずと限られることになりませんが、この研究成果を現場の実際に適用して、普遍化できる方途を探つてほしいと思います。現場で生起した問題から出発した研究でないと、その成果を現場に還元することは困難であるためです。皆さんの科学的・実験的研究は現場の実際と有機的に関連してこそ飛躍が期待されます。

まずは現場に生起した諸問題の研究を通して得られた成果を帰納的

に捉え、これを束ねて理論化する必要があります。さらにそれによつて得られた理論を演繹的に現場に照射し、検証して新たな知見を得るようにすることが大切です。このような思考法は指導して頂いた先生から日常的に教わってきた事柄です。当然のことながら、身に付いているものと確信します。

ひとひと

最後に、スポーツは人間と人間を結びつける紐帯の役割を有しています。あるときは社会にあつて「平和な国際社会」の実現に向かい、あるときは過疎化社会や無縁社会にあつて“つながりを生きる人間社会”の創出に向かいます。スポーツに関する教育も研究も豊かな福祉社会の実現にこそ必要とされていることを脳裏に焼き付けて下さい。皆さんの教育活動や研究活動がさらなる豊かな未来社会に貢献されんことを期待して、贈る言葉といたします。

平成二十九年三月十日

日本体育大学長

谷釜 了正